

# 防木ジャーナル

THE BOSUI JOURNAL

ROOFING/SIDING/INSULATION/RENEWAL

# 5

2014

No.510



- ❑ 塗り床材の要求性能と環境対応
- ❑ 露出防水層の耐久性能
- ❑ 道路橋床版防水の保全

# 外部配管の外面腐食

鈴木 哲夫

建物の屋上には、消防補給水槽や給水設備などの露出配管があり、写真-1のように配管の外面に防露材を巻いて仕上げにラッキングを施している。ラッキングは継ぎ目がありシーリングを施しても気休め程度と言ってよく、防水性が全くない。

写真-2のとおり、ラッキング材と防露材を撤去し、配管を確認すると、配管外面のほぼ全面が錆びており、写真-3の部位に至っては、いつ破裂してもおかしくない状態まで錆腐食が進んでいた。ラッキング材は防水性がなく、配管に綿状のグラスウール防露材を巻いているのだから、雨水が浸入すれば防露材は水を蓄え、ほとんど乾燥することはないものとみられる。この状態が長期間継続すると、鋼管などは外面腐食を起ししやすい。

写真-4では、比較的海に近いマンションで、1回目の大規模修繕工事のとき

にラッキング材の腐食があったが、配管の腐食確認を行わず、腐食があった部分にアルミ箔テープを目張りして塗装するにとどまった。これは、改修の判断の誤りだ。外部露出配管はいつも雨水が入り、蓄水している状態だという認識に立ちたい。ちなみに、写真-4の配管は外面腐食が相当進んでおり、急ぎで配管の交換を行った。もっと早い時期に外面腐食を止める手立てを施していれば、交換するまでには至らなかっただろう。



写真-4 補修判断を誤り、ラッキング材腐食部補修にとどめた

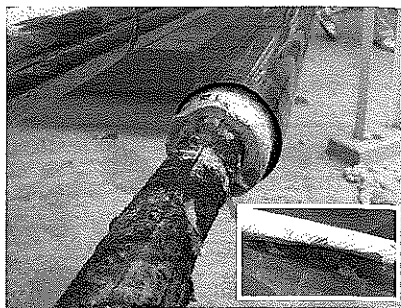


写真-1 外部配管と防露材

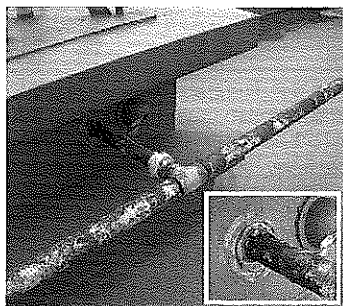


写真-2 外面腐食を起こした配管

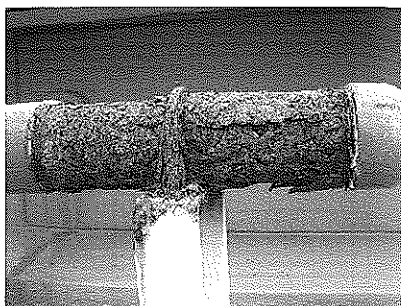


写真-3 表面がぼろぼろになった外部配管は破裂寸前

外部配管には、新築時にほとんどの建物でグラスウールなどの綿状になった防露材を使用しているが、使用はできるだけ避けたいところだ。改修にあたっては、水を吸わないポリスチレンなどの防露材に変更することが好ましい。しかし、防露材が水を吸わないだけではまだ不十分である。水は入ってくるのだから、排出する工夫が必要である。横引き配管の場合は、ラッキング材の下面にできるだけ小間隔で穴を開け、水の排出ルートを確認する配慮があれば、配管の延命策に役立つと考えている。何年も前からラッキング材メーカーに穴を開けた製品を用意できないかと注文しているが、今のところ作ってくれる様子はない。

((有)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役社長)